

ISSN 0910-2396

野鳥大判

—北海道—

第 65 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会
発行年月日 昭和61年9月21日



カラフトアオアシシギ 1985. 9. 13 鶴川河口 撮影者 速水 藤二郎



もくじ

私の探鳥地(豊滝～砥山ダム)	塚原 英代	2
俱知安町で見られる小鳥たち	石井 正司	3
珍鳥2種	井上 公雄	8
樽前鳥もよう	三浦 二郎	9
探鳥会報告		10
探鳥会案内		14
鳥民だより		14

私の探鳥地 ⑥

豊滝から砥山ダムまで 塚原 英代

豊平川をはさんで、すぐ向かい側に八剣山をのぞむ豊滝小学校に勤務しはじめて4年。

豊滝の自然に魅せられて、土曜の午後はもちろん、日曜日などにも出かけて、歩きまわっています。その日の気分や天候、時間の都合などによりいくつかのコースがありますが、今回はその中の豊滝から砥山ダムまでの旧国道コースをご紹介します。

国道230号線定山溪の少し手前、「豊滝小学校前」バス停を出発。八剣山へむかう旧国道を歩き出すと、左の空地では、ホオジロが、ネコヤナギのてっぺんで、“我ここにあり”と言わんばかりにさえずっています。右手のカラマツ林では、キクイタダキが忙しそうにチッチッと枝から枝へと飛びまわっています。キリキリコロコロという声に顔をあげると、頭の上をカワラヒワが数羽、豊平川にむかっていきます。角の電柱にはスズメが巣を作っていることもあります。このあたりは、スズメとニューナイスズメが入り交じっていて時々けんかをしていることがありますので、注意して観察します。

左に折れて、坂を下る高い木の梢では、オオルリが、きれいな声を聞かせてくれます。馬頭観音を左に見て、小さな川にさしかかったら、カワガラスの姿を探します。チッチッチッと鳴きながら飛ぶハクセキレイの後を追うように歩いていくと、八剣山へむかう道との別れ道。ここには大きな桜の木があり、春にはみごとな花を咲かせ、夏にはアオバトがその実を食べに集まっ

て来ます。

ここでちょっと足をのばして、豊平川にかかる栄橋まで行ってみます。橋の上からは、ヤマセミが一休み

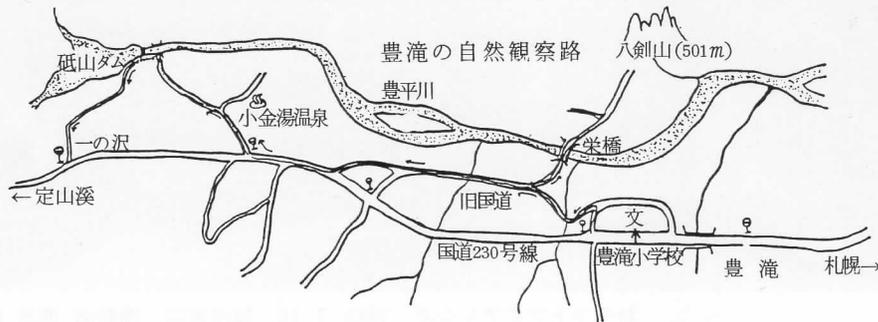
しているのや、イソシギがにぎやかに鳴きながら岩の上で遊んでいるのが見られたりします。また時には、アオサギが砥山ダムの魚を狙ってか、はるばる野幌方面(?)から飛んで来るのに出会うこともあります。八剣山の上空では、ハリオアマツバメが飛び、天候によってはアマツバメも見られます。また、晴れた日には、クマタカがえものを狙って飛んでいたり、ハヤブサが出ることもあります。

小金湯にむかう旧国道に戻って歩きだすと、旧定山溪鉄道の土手では、アオジがのどかな唄を聞かせてくれます。左側の沼のむこうでは、ヤマゲラが木をつついています。コクワのつるのかげには、アカゲラもいるようです。

春ですと、足もとに咲くニリンソウなどを見ながら更に行くと、右手に大きな石碑が見えてくるあたりで、イカルの声が聞かれます。また、カラ類の群れに出会うこともあります。

国道に出て、更に行くと、小金湯温泉に行く道に出ます。その道を下っていくと、春早くには、ミズバショウの群落がみられます。旅館の方へむかわずに、定山溪方面へどンドン行くと、左の土手一面エゾエンゴサクの大群落がみられます。ほんとうに、青いじゅうたんを敷きつめたよう。それはそれは素敵なところですよ。(ぜひぜひ、春一番にどうぞ)

カラマツ林をぬけると、もう砥山ダムです。ここは、探鳥地としても紹介されていますがキセキレイ、オジ



ドリ、マガモ、コガモ、カワアイサ、ときにはキンクロハジロなども見られます。

時間のある時にはここでしばらく待っていると、カワセミのダイビングが見られることもあります。静かな湖面では、魚のはねる水音が聞かれ、対岸の野鳥の声も聞こえてきます。トビの笛を吹くような声ものどかに聞こえます。左の広場では、モズがギチギチッと鳴っていることもあります。秋の渡りの時期には、近くの水田あとで、カンラダカの群れもみられます。

体力に自信があれば、ここから更に、一の沢や、百松沢に足をのばすのもいいのですが、今回は、この辺でおしまいにします。

<見どころ>

渡りの時期には、カンラダカ、ベニマシコ、ベニヒワ、ハギマシコ、レンジャクなど。

周年では、ヤマセミ、カワガラス、カラ類など。

〒005 札幌市南区真駒内南町2丁目

倶知安町で観られる小鳥たち

倶知安町立比羅夫小学校教諭

石井正司

1. 本校の概況

(1) 校 区

イ. 位置と自然環境

本校は、倶知安町の中心街から国道5号線に沿って南に5kmの所にある。前方の南東には、えぞ富士と呼ばれる秀峰羊蹄山1893mがそびえ、後方の西には、スキーのメッカ第二のサンモリツとして知られるニセコアンスプリ山を望む標高250m前後の羊蹄山麓の台地上にあり、自然環境には恵まれている。

学校から3kmはなれる半月湖は、羊蹄山の寄生火山で、流れ入る川も出る川もなく、深く林に囲まれ、野鳥の憩いの場となっている。

冬は大変厳しく、最低気温は-20℃をこえ、積雪の深さは3m以上にもなり、校舎は雪にうずもれ、倶知安町スキー客で賑わいスキーの町、自然のある町と化す。しかし、7月～8月は平均気温21℃を示し暑い月が続く。

ロ. 生活と産業

校下の戸数は43戸で、大部分は農業を営み、種子パレイショ、メロン、カボチャなどの果菜、乳牛が主なものである。パレイショ栽培は開拓以来のものであり、校章はパレイショを図案化している。

近年、紙工場、飼料工場、アスファルト工場、し尿処理場などができ、生活環境への関心が高まっている。

(2) 学校の状況

イ. 沿 革

本校は、開村直後の明治31年に寺小屋教育で始まり、1年後に、倶知安第4尋常小学校として創立、以来88年、982名の卒業生を世に送り出している。かつて130名いた児童も次第に減少し、町の学校適性規模の配置

計画により、昭和61年度で閉校し倶知安町立西小学校へ統合することが決定している。

ロ. 現 況

児童数は、11名の2学級編成 教員3名 技術1名
僻地 1級 P T A43戸 保護者9戸

2. 野鳥保護に対する本校の考え方

(1) 自然保護の立場から

イ. 科学の進歩によって、人間は自然界の持つ力の圧迫をはねのけ、自然を友として、その恵みを十分に享受しようとしてきた。いつしか、人間は自然を思うままに左右し、自分たちの豊かな生活のために奉仕させ搾取することを平気で行うようになった。人間の生活を豊かにするという名のもとに、ついにはレジャーのためにも、開発の手を原始林にまで伸ばしていった。

自然が自らをコントロールする力、動植物が自然の摂理の中で生き続けていく働きという大きな生命のサイクルを人間の都合で絶ち切るとき、動植物は生存のバランスをくずし、自然は回復する力を失っていく。

害虫を駆除するための薬剤は、害虫だけではなく、人体にも残留して、人間の生命をおびやかしている。このような現実に向け、教育は何をなし得るかを、私たちは真剣に考えるべきではないか。

ロ. 野鳥の住み得る環境が人間の住み得る環境であり、野鳥は自然保全の自然破壊のパロメーターであると言われている。

野鳥の数が減ったと識者が憂い、一方、日本では相当数の鳥が狩猟によってその生命を失った。それでも「愛鳥週間」は毎年やってくる。さて、「野鳥保護」をいうとき、一般には巣箱の設置と誘致木の植樹が先

ず考えられてきた。巣箱を中心とする考え方には、それなりの意義があることは認めるが、そこにとどまっていたは、いつまでも愛鳥の行事の域を脱し得ないものである。どんな鳥でも巣箱に営巣するわけではないし、今植える苗木が野鳥を誘致するまでに生長する時まで自然破壊を止めておかななくてはならない。

私たちは、より広い立場から「愛鳥」の意味と、そのことばに含まれている本当のねらいや願望を考え、更に、本校の現状の中で“何をなし得るか”を常に検討していかなければならない。

ハ、本校のような小規模な小学校で、児童数11名の現状では、巣箱設置や野鳥保護林管理の仕事を児童に要求することはできない。だからこそ、未来を背負う子どもたちの教育をあずかる私たちは、破壊されていく自然、追われていく野鳥を前にして「自然保護」「野鳥保護」が臨牀的に叫ばれている中で、美しい自然と野鳥を愛し、守り続けようとする気持ちを、子どもの中にもしっかりと植えつけなければならない。“なぜ野鳥を愛するのか”を理解させ、野鳥を自然とのかかわり合いに目を向けさせることこそ、教育に求められている役割であろう。

(2) 情操育成の立場から

イ、都会と農村とは道路の開発、交通機関の発達により、又、通信、報道手段の普及により、空間的にも時間的にも距離がちぢまったことは事実である。

しかし、文化的施設や行事に見放され、生活上も時間に余裕のない農村では、生活に特別の刺激も変化もなく、子供たちは、日々慢然と暮して物事に積極的意欲を示すことなく、ただ、テレビ等にもみ生活の変化を求めがちである。

子どもたちにとって、わずか11名足らずの児童が唯一の大きな集団であり、学校から帰れば、家族以外の人々との交流がほとんどないので自分の周囲を見なおし、普段は見落としている自然の美しさや、その神秘さを見つけ、物事を正しく豊かな心で見、考え、その中から常に新しいものを感じとれる豊かな情操を養うことは極めて重要な課題である。

ロ、野鳥の美しさを見て関心するだけではなく、生態の学習を通して、生命保存のための野鳥の努力や自然の摂理を学び、野鳥と自然と私たちの生活にまで広げて考え得る子どもを育てることは、本校の教育のねらいの1つである「豊かな情操を育てる」ことに結びつくものであると共に、自然保護を願う心を育てる道であろう。

自然を愛し、野鳥を愛する心は、やがては人を愛し、平和を望み、生命を尊ぶ心と通じる。

(3) 可能性を伸ばす立場から

イ、地域の実情に応じ、特性を生かしてその地域にねざした教育をしようとするとき、羊蹄山麓に位置する本校にとって、野鳥はよい教材である。教科書を越え、教室のドアからはみだしたところにも、子どもの心を育てる教育がある。

ロ、専門的知識を持つ指導者に恵まれず、目と耳と図鑑だけを頼りとして、小学生が野鳥をどの位発見し識別し得るかの危惧は、だれしも持ったところである。

しかし、この一見無理と思われることでも、野鳥観察への意欲を引き出す段階的指導によってある程度は可能となるであろうし、新しい刺激に対する反応は、大人よりも子ども達の方がするどいはずである。

私たちは誰れでも、特に図鑑で確かめることなしに、カラスやスズメを知っている。とすれば、何年も見続けるならば、今未知の鳥でも、ある程度見分けることが出来るようになり、去年見落した鳥でも来年は発見し得るであろう。

子ども達の持つ可能性を大人がきめるのでなく、あらゆる機会と場を把まえてそれを引き出す工夫が必要である。

3. 野鳥観察の状況

昭和40年8月30日北海道より「愛鳥モデル校」として指定を受けて以来、20年間、絶えることなく比羅夫での児童の観察は実施されてきた。教材、道徳、特活との関連を計画的に持たせ、高学年は毎朝、学校周辺で観察を続けている。探鳥会も年に10回計画され、1年生から6年生までの全員双眼鏡を持ち教員を含め14名の半月湖畔での探鳥会では多くの小鳥を確認している。比羅夫地区で観られる小鳥は俱知安町全域にあてはまるのである。最近、本校閉校に伴い、地域住民から「愛鳥」「自然保護」存続要請の声が高まりつつあり、同好会結成の動きが活発化しそうである。

4. 今までに観察された鳥

40年8月に愛鳥モデル校に指定されて以来、今日までに39科163種を確認している。

高学年は毎朝、全校的には年間10回ほどの探鳥会などで確認されたものである。今回野鳥リスト(表1)にしたのは、57年4月から61年5月までに子供たちとともに確認した30科90種である。

学校周辺では、4月にヒバリ・ウグイスなど(表2)の初鳴きで始まり、夏鳥たちで大変賑やかになる。

58年4月には、ナキイスカ・アマサギを確認したが、その後は見られない。ここ2・3年ヒレンジャク・キレンジャク・マヒワ・イスカなどが多く観察されている。

表1 倶知安の野鳥 (1982.4 ~ 1986.5)

科	種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
ガンカモ	マガモ													
	カルガモ													
	オシドリ													
シギ	オオジシギ													
	ヤマシギ													
	イソシギ													
クイナ	バン													
	ヒクイナ													
サギ	アマサギ													58.4
ワシタカ	トビ													
	ノスリ													
ハト	キジバト													
	アオバト													
チドリ	コチドリ													
ホトトギス	ツツドリ													
	カッコウ													
アマツバメ	ハリオアマツバメ													
	アマツバメ													
カワセミ	カワセミ													
	アカショウビン													
キツツキ	コゲラ													
	アカゲラ													
	クマゲラ													
	ヤマゲラ													
	アリスイ													
ヒバリ	ヒバリ													
ツバメ	ツバメ													
	イワツバメ													
	ショウドウツバメ													
セキレイ	セグロセキレイ													
	ハクセキレイ													
	キセキレイ													
	ビンズイ													
ヒヨドリ	ヒヨドリ													
モズ	モズ													
	アカモズ													
レンジャク	ヒレンジャク													
	キレンジャク													
シジュウカラ	シジュウカラ													
	ヒガラ													
	ハシブトガラ													
	ヤマガラ													
カワガラス	カワガラス													
ミソサザイ	ミソサザイ													
エナガ	シマエナガ													

科	種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
ホオジロ	アオジ													
	ホオジロ													
	シマアオジ													
	オオジュリン													
	ホオアカ													
	カシラダカ													
ヒタキ	ウグイス													
	センダイムシクイ													
	メボソムシクイ													
	ヤブサメ													
	エゾセンニュウ													
	キビタキ													
	キクイタダキ													
	コサメビタキ													
	ノビタキ													
	ルリビタキ													
	コヨシキリ													
	オオヨシキリ													
	ツグミ													
	クロツグミ													
	トラツグミ													
	アカハラ													
	シロハラ													
オオルリ														
コルリ														
ノゴマ														
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													
キバシリ	キバシリ													
ハタオリドリ	スズメ													
	ニュウナイスズメ													
ムクドリ	コムクドリ													
	ムクドリ													
カラス	ミヤマカケス													
	ハシブトガラス													
	ハシボソガラス													
アトリ	マヒワ													
	ベニヒワ													
	ベニマシコ													
	カワラヒワ													
	シメ													
	イカル													
	イスカ													
	ナキイスカ													58.4
	アトリ													
	ウソ													58.2

表2 主な野鳥の初観察日調べ(昭和48~昭和61年 比羅夫小学校校下)

	48年	49年	50年	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	平年	60年	61年
ヒバリ	4/1	3/26	3/30	3/16	3/28	3/15	4/6	3/30	4/7	4/8	4/10	4/12	4/1	4/2	4/2
キジバト	3/20	3/4	3/8	4/2	3/30	4/12	4/8	4/8	3/30	4/7	4/6	4/26	4/4	4/9	4/18
アオジ	4/5	4/7	4/13	4/14	3/21	4/10	4/20	4/5	4/11	4/17	4/21	4/26	4/15	4/14	4/16
ツバメ	4/7	4/7	4/12	4/28	4/11	4/19	4/28	4/20	4/20	4/21	4/10	4/15	4/17	4/10	4/24
オオジシギ	4/22	4/22	4/2	4/22	4/20	4/21	4/21	4/22	4/20	4/26	4/22	4/21	4/20	4/17	4/20
ウグイス	4/19	4/20	4/15	4/26	4/20	4/23	4/20	4/23	4/22	4/16	4/22	5/7	4/22	4/17	4/25
カッコウ	5/19	4/12	4/10	5/16	5/16	4/22	5/20	4/23	5/16	-	4/25	4/29	4/23	5/5	4/26
コムクドリ	5/6	3/30	4/15	5/1	4/23	4/22	5/7	5/6	4/28	4/8	-	5/7	4/26	5/14	5/12
トラツグミ	5/7	4/20	4/17	4/29	5/7	4/26	-	5/1	4/18	4/10	4/15	5/4	4/26	-	4/19
ツツドリ	5/11	4/25	4/22	4/6	5/3	4/28	5/10	4/30	4/20	4/20	-	-	4/28	4/30	4/25
ウアカシヨ ビン	5/11	4/6	4/17	5/5	5/27	4/26	5/19	4/29	6/26	4/13	-	-	5/7	-	5/10

珍鳥 2 種

——ツクシガモとヒメウズラシギ——

井上 公雄

1. ツクシガモ

7月26日朝日新聞夕刊に、珍客石狩川に飛来の見出しの下に3羽の美しい写真と記事を見た人も多いと思う。この珍客の発見撮影が我が会員福岡研也さんである事に気付いて居る人も又多い事だろう。

福岡さんの話によると7月17日朝、札幌市郊外の石狩川河口付近を歩いていると(探鳥)カモ・カモメ類に混って全体は白色で頭と首の部分が黒緑色の見馴れない中型の水鳥が3羽優雅な羽ばたきで飛んでいるのを見つけた。

水面に降り浮ぶ優雅な美しい姿に見惚れ乍らカメラに納めた珍鳥に我眼を疑い乍らもツクシガモである事を確認するのに時間はかからなかった。この鳥非常に警戒心が強くシャッターチャンスを掴むのに苦心したとの事。

ガンカモ科に属するこのツクシガモは中国北部奥地モンゴル地方で繁殖、冬九州の有明海に渡来するが、他の地域では極めて稀れで、北海道に飛来した記録としては、大正8年と昭和55年の冬の2回ある丈観察記録等によると、ツクシガモは12月から3月初め頃まで越冬のため大陸奥地から飛来し九州の有明海付近を中心とした西日本一帯で越冬夏の北海道では勿論初めての迷鳥で野鳥観察記録上特筆すべき出来事として記録されるだろうと思う。



ツクシガモ(福岡研也氏 撮影)

2. ヒメウズラシギ

8月3日連日30度を越す暑さを免れて幾分涼しい鵜川に羽田さん福岡さん等4人で出向いた。鵜川はガスがかかって私達の期待(避暑)に応える様に爽やかな風が迎えて呉れた。放牧場迄の両側の牧柵や牧草畑には巢立ち間もない幼鳥を交えてノビタキ・オオジュリン・ホオアカ・

カワラヒワが姿を見せヒバリが良く飛び立つ。ショウドウツバメが夏の牧場の広々とした空間を楽しむ様な軽やかな曲線飛行が快い。広い放牧場を通過して鵜川の川岸に着く。鉄橋の下流域は程良い干潟となって括っていた。シギチドリの渡来には少し早い時期ではあるが、早くも上流の中州にはムナグロが7, 8羽思い思いにアオサギがそしてイソシギ、メダイチドリ等が格好な干潟に可愛らしい足取りで餌を求めて忙しそうに走り回っていた。川の流れに添って下流に向う。流れに崩れた土手を利用したコロニー周辺にはショウドウツバメが無数に乱舞して居た。終着地点の河口付近は潮が引いて広々とした絶好の干潟になっていたがコチドリとイソシギが1羽の外はシギチの姿はなく静かなものだった。お昼の弁当を済ませ心地良い潮風に吹れながらノンビリムードで周辺を見渡して居ると8,90米程先の水際に2羽のメダイチドリに混って小型の識別不明のシギが1羽、早速野鳥フィールドガイドと照し合せ乍ら入念に観察を続けた。体がメダイチドリより少し小さくたんだ羽根が尾より長い頭上から体の上面は黄褐色で黒い軸が有り顔から胸は淡黄褐色で黒い斑点がきれいに連なり腹は白く足は黒い。野鳥フィールドガイドに従って丹念に識別観察を繰り返す中に体の大きさが本より少し大きい以外はヒメウズラシギの識別ポイントに合致する。別記資料によるとヒメウズラシギは北米大陸北部の乾燥したツンドラ地帯で繁殖し南米大陸南部地方で越冬する渡り鳥で日本では観察記録の極めて少い迷鳥との事。生憎カメラの持ち合せがなく写真に残すことが出来ず誠に残念であった。

〔観察者〕羽田恭子 福岡研也 佐々木武巳 井上公雄
過去の観察記録 三重県伊勢 1956 9 1 宮城県
1962 千葉県片貝 1963 9 30 1969 9 1~7
石垣島 1971 愛知県 梅田川 1984 9 29

〔繁殖地〕北米大陸北部の乾燥したツンドラ地帯 越冬地 南米大陸南部 チリ アルゼンチン

〔参考資料〕日本産鳥類図鑑1974版 日本鳥類目録1974版 フィールドガイド日本の野鳥1984版 生物大図鑑鳥類編 世界文化社1985版

〒064 札幌市中央区南6条西11丁目 共済ハウス

樽前鳥もよう

三浦 二郎

「三浦さん、何だって苦小牧なんかに行くんだ」と根室管内の学校を退職する前に、根室の鳥仲間からずいぶん責められました。中には「ウトナイにサンクチュアリがあるからだべさ」と云う人もおりましたが、樽前TBSの分譲宅地を購入したのは、サンクチュアリ建設計画が出るよりずっと前のことで、そこにしか家を建てる土地がなかっただけのことです。

樽前地区は、苦小牧市の西端の地区で、ものの5分程車で走ると別々川が白老町との境界になっております。白砂を洗う太平洋の潮が前浜になっていて、幕末時代からイワシ漁で栄えたといいますが、最近はそのような盛漁はないようです。北に樽前山が最も姿よく眺められ、常時ふたすじの白煙を吐いておりますし、その山を発した樽前川が宅地のすぐそばを支笏熔結凝灰岩層を下刻して作った函状の峡谷の樽前ガロウとして特異な景観を形成しております。嬉しいことに、この一帯は「樽前ガロウ自然環境保全区域」として指定されております。分譲宅地は1,200戸分に区割されているそうですが、今のところ、私の家を含めてたった4戸しか家が建っておらず、広大な原野になっております。

こういう山あり、海あり、川と森林あり、そして広大な原野ありといった自然環境がすっかり気に入って、昨年の4月から移り住んでおります。そして、根室原野ではめったに聞かれないホオジロが4月早々に、そして20日すぎにはクロツグミが朗らかに歌ってくれ、根室との温度指数の違いを思い知らされたことでした。

昨年は、カッコウの初鳴きを聞くか聞かないかで連続して本州方面に出かけたので、夏鳥達との出会いもそこそこでしたし、秋の渡りシーズンも日中鳥類標識調査交流ということで中国に出かけたりして、樽前で調査はおろそかになりました。そうやって出歩くことが多い生活をしておりましたが、在宅の時は毎朝自宅周辺のウォッチングは欠かすことなく、記録の蓄積は結構なものになりました。びっくりする程に豊かな鳥相であるとは云えませんが、環境の多様性に応じた程度のもはあります。

近所に森田さんというお宅があって、この冬にはオオマシコ十数羽とミヤマホオジロ数羽がそのお宅のミニサンクチュアリに居つき、そのうちの数羽が私の貧弱な庭先にもやってきて粒餌をついばんでくれました。

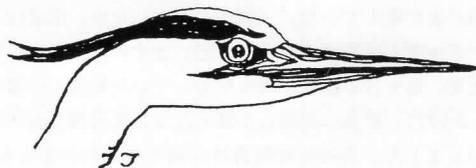
そうやって楽しんでいたりする日、TBSのIさんが遊

びにきて話し込んでいるうち、「この辺にはどんな鳥がいるのでしょうか」と質問されたのです。鳥について全くの素人の人に、あれやこれや一度に鳥の名前をならべ立てても無理なので、「そのうちに、あんたにも分るように書いてやるよ」と云っておいて、ひまを見てタイプで打ったものを送ったのです。それを読んだIさんが、「何だか鳥のことが分った気になりましたよ。これをこのままにしておけないので、何とかしようと思いますが、私にまかせてくれますか」というので、「いいよ」と軽く返事しておいたのです。それが、嶋田忠さんのヤマセミの写真を表紙にした「樽前の野鳥観察ガイド」なる小冊子になったものです。

その小冊子の表紙のヤマセミは、森田遊園の人口沼に必ず見られるようになりましたし、最近ではカワセミ夫婦とアオサギも常連になっており、ここの森田さんの家族の観察では、自宅周辺だけで90種もの野鳥を記録し、今では来訪者に野鳥の解説を立派になさっております。

苦小牧には、東にウトナイサンクチュアリ、高丘に北大演習林があり、そして今、西の樽前地区が野鳥観察の適地として育ちつつあるということになります。

〒059-12 苦小牧市樽前394-1003





野幌

61. 4. 20

矢野 玲子

9時20分、大沢口に
着く。

まずはオオジシギの
けたたましいお迎えの
声。曇天の彼方から急

降下をさかんに繰返している。「さっきウグイスの声を聞いたヨ。」と誰か。

今日はかなり強い風ではあるが、長靴にヤッケ姿の私のほほに和らかい感触を残して通っていく。隣の今野さんのリュックの温度計は13℃だ。

9時30分過ぎに出発する。残雪と土とが半々の道でかなり歩きづらい。北区の仲間3人で初めてこの会に参加させていただくので何ともいいがたい緊張感と冬ごもりあけの重い足とであまりスマートに歩けない。融雪の水のあふれる沢の南側には福寿草、中程には赤紫のザゼンソウ、ミズバショウはちょっぴり顔を出している。

「ピッ、ピッ、ピッ。」とかなり大きなさえずりがする。なんだろう？わからない。前の方を歩いている人に聞く。「ああ、あれはゴジュウカラ。」「ああ、まただまされた。」と私。「ゴジュウカラはだまさないヨ、わかかってあげなければ。」うん。そうなんだ。勉強が足りぬ。ごめんネ。ゴジュウカラ。

松川の池にはオンドリとカイツブリがいた。オンドリ

は木の上で長い間、だいたい色のイチョウ羽を見せてくれる。ありがとう。君の姿は何たってカモでは一番だ。昼休み中、マヒワの群れが頭上を通る。群れの中にはベニヒワもいたとか。私はまだベニヒワの赤い頭を見たことはない。残念だった。

出発点に戻ると外はまだ強風であった。久しぶりの長歩ぎと夏鳥との出会いで充実した探鳥であった。

〔記録された鳥〕アオサギ、オンドリ、カイツブリ、トビ、オオジシギ、キジバト、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ルリビタキ、ツグミ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニヒワ、ベニマシコ、ウソ、ニュウナイスズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上34種

〔参加者〕戸津高保・以知子、柳沢信雄・千代子、田辺至、渡辺照彦、横田通典、曾根モト、矢野玲子、高梨敏子、浪田良三、堀内 進、野口正男、清水朋子、松館弘昌、早瀬広司、羽田恭子、園部恭一、井上公雄、谷口登志、今野 弘、道川 弘・富美子 以上23名

〔担当幹事〕早瀬広司・道川富美子

〒001 札幌市北区屯田3条1丁目

春雨の野幌森林公園

61. 4. 27

熱海 智美

忘れられないあの日。三月十四日の朝、学校のガラス張りのアーケードに激突したらしく、白い残雪の上に美しい羽色を横たえていた。抱き上げると息はすでに絶えていたが、深く厚い羽毛のために感触は暖かかった。帰りぎわに、その場を再び見回してみたところ、今度は朝と違う、スズメ大で、全体的に黄緑色をしたかわいらしい鳥がまた死んでいた。（調べてみましたが、前者はヒレンジャク、後者はマヒワだと思います。）

元来、鳥も含め動物に興味をもっていた私はこの事をきっかけに、野鳥への関心が深くなり、先日探鳥会へ初参加しました。今回は野幌森林公園で行なわれました。

何の知識も兼ね備えていない私は、エゾリスを始め、十種類前後の野鳥を緊張や驚きや興奮のはざまで見たと
いう具合で、メモもろくにしていなかったので、帰ってから自分の記憶と図鑑と照らし合わせて確認するのが大変でした。初めてということや雨のためにうまくいきませんでした。満足感や充実感に浸っているのは、参加されてた方々の寛大な心に感激したからでしょう。野鳥を通して、自然に触れられているからでしょうか…。最後に、中高生の参加が無かったのは不思議でした。

〒001 札幌市北区北25条西2丁目20-105

野幌森林公園

61. 4. 27

鈴木 理栄

土曜日、次の日の予定を、友達と話していた。
「理栄、明日出かけるの」「うん。探鳥会。」「えっ探

鳥会？」
二・三人の友達に、探鳥会へ行くことを話したが、皆

探鳥会について聞き返してきた。実際、私も、友達に誘われた時は、「何するの」なんて、恥しい質問をした。

探鳥会というのが、字のごとく、鳥を探すことくらい私にだってわかるが、あまりにも、今まで過ごしてきた日常生活と離れていたの、ピンとこなかった。

誘いに乗ったのは、人と違ったことをしたいという興味心からだった。朝早く起きて何のことなく用意をしていて、気持ちが、ワクワクしたり、不安になったりと、その日の天気のように、私の気持ちも不安定だった。

そしていざ集合地へ。その間、長谷川さんという人と知り合い、とてもよくしていただいて、不安が、少し解消されたりして、日常生活では、味わえない大人との、接触到、感激したり、探鳥している間、鳥を観察するよりも、皆さんを観察していた私は、大人の名に、ふさわしくない人のいる現代で、心に余裕を持って、自然と接している皆さんに、尊敬心を抱いた、この会でした。

〔記録された鳥〕カイツブリ、アオサギ、トビ、ハイタカ、オオジシギ、キジバト、ヤマゲラ、アカゲラ、オオ

アカゲラ、コゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ミソサザイ、クロツグミ、ツグミ、ヤブサメ、キクイタダキ、キビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ウソ、イカル、シメ、ニュウナイズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上37種

〔参加者〕渋谷信夫・弘子、福岡研也・玲子、福岡善也・都代子、井上公雄、永井 愛、星野加奈、青柳伸介、鈴木大和・由果、佐藤彰夫・未利子、戸津高保・以知子、長谷川涼子、熱海智美、鈴木理栄、野口正男・キヨ、船尾恭子、田中礼子、谷口登志、道川 弘・富美子、佐々木武巳、香川 稔、高倉まり子、矢野玲子、高梨敏子、今野 弘 以上32名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

〒004 札幌市白石区厚別北4条3丁目8-7

野幌森林公園

61. 5. 11

高梨 敏子

今回で3回目の参加になります。家から車で30分位のところにこんな自然があるなんて、とてもいいですね。歩行6キロと聞けば、ずいぶん歩くなあ、と思うのですが、探鳥の6キロは、ここちよい距離です。大沢口からなので、記念塔からのと、見落とし、聞き落とし、未熟等でチェック時のその数にガーンときます。

今日は、野幌では、はじめてのカワセミの雄・雌に会い、「ここにもいる」とうれしく思っています。カワセミはそれほど興味のある鳥ではなかったのですが、はじめて新川で、たまたまレンズに入った姿に感動したものです。そして、「こんなところにいるなんてまちがってる」とつぶやき、もっと良い環境はなかったのか、と何となくさみしくなったりで、自然の大切さを改めて感じています。それにしても、声が後からついてくる速さと、小さな体と、そのわりにギョロッとにらまれそうな大きな目、翼の下の朱色は私を興奮させるには十分です。それからは探鳥地のどこでも、必ず目にはしています。すてきな鳥です。多才な能力のある鳥だと独断し、ファンにもなっています。野幌のカワセミは、いい所にいると思うのですが、あの崖を子供等が登ったりすると聞き、無事、雛を育てあげることができるように思うのです。鳥はカワセミだけではないと言われつつも、今はこの名を聞くと胸が踊ってきます。そう言えば、この日も雨に降られ気温も上がらず、おにぎりを食べながらガタガタしたのに、うれしさに、晴天のここちだったと思って

います。

〔記録された鳥〕アオサギ、オンドリ、トビ、オオジシギ、キジバト、カワセミ、ヤマゲラ、コゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ツグミ、ヤブサメ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、ニュウナイズメ、カケス、ハシブトガラス、ハシボソガラス 以上36種

〔参加者〕小川亮三・康子、熱海智美、田中礼子、松井 昌、小林敬三・和子、園部恭一、高倉まり子、西川喜久世、矢野昭二・玲子、佐藤典子、高梨敏子、村上君江、綿谷千冬、近藤由光・ミヨ、岬香名美、鈴木俊理、澤田幸子、大野信明、佐々木武巳、浪田良三、野口正男、山田 浩、鈴木大和、こんのひろし、西 秀司、宮田 久、戸津高保・以知子、羽田恭子、福岡研也、田辺 至、白沢昌彦・光明、柳沢信雄・千代子、霜村耕介、武沢和義・佐知子、道川 弘・富美子、井上公雄 (45名)

曇り後小雨 8.30~13:00

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

〒001 札幌市北区北11条西1丁目 第3長山MS403

千歳川一泊探鳥会

年に一度の千歳の一泊探鳥会は多種多様な鳥との出会いが楽しみな丈に空模様が気がかりであった。可成りの冷え込み乍ら雨の心配のない夜明けに胸を撫で下す前夜からの宿泊組が26名、4時の出発に駆けつけた熱心な参加者を加えて34名が前庭に集った。夜の明け切らぬ中から近くの樹上にニュウナイスズメ、カワラヒワ、ヒガラ等が姿を見せ遠くからアカショウビンの声周辺の森のクロツグミ、アカハラ、センダイムシクイ等のコーラスに送られる様に出発である。処々に薄霜が見られる。冷え込みの故か鳥の出現も少い中で爽やかなアオジの声元気者のヤマガラ、ホオジロ、オオルリ等の声や姿を観察し乍らサイクリングロードに入る。左手を流れる川の淀みに番いになったキンクロハジロ、婚姻色のオスが人目を惹く。岸辺の水際に一羽のイソシギが寂しそうに餌を探して居た。園地に着いて小休止近くからツツドリの声が聴える。橋の上流にマガモが泳いで居た。繁殖期を迎えて輝くばかりの美しさに変身して居るのに驚く。昨年は十数羽の群れになり特異な美しさを楽しませてくれたアオバトの森の主は一羽丈と物足りなさは否めないがしっかりとプロミナに納って交替で皆の目を楽しませてくれた。ふ化場脇を過ぎ車道と岐水ダムへの林道に入る。暫く往くと上流から下流に向かって沢の上を飛んで行くヤマセミを発見突然の出現に樹木の合間を見え隠れ姿を興奮しながら見送る流れの中に倒れた大木の根元がお気に入りなのか出入りを繰り返すカワガラスも観察する。沢地や道端に花を咲せ始めたオオバナノエンレイソウ緑の中に白い塊となり白点をなつて散石する清潔な美しさのニリンソウ盛りを過ぎたフッキソウ、エゾエンゴサクそしてタチツボスミレも薄紫の可憐な花を咲せて心を和ませてくれた。曇天無風と好条件にも拘らず冷え込みの故か鳥の出現数も少く早いペースで目的地のダムに着いた。水面にはキンクロハジロが10羽余り羽根を休めセグロセキレイが巣造りに励んで居た。此処の高台に腰を下し溪谷を見下し自然を眺め澄み切った空気を胸一杯に吸って朝食にする。近くの中枝にベニマシコが現れダムの放水路附近をキセキレイが活発に動き回りクロツグミ、アカハラ、アオジ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、ヒガラ等

61. 5. 17・18

井上 公雄

の囀りを聴き乍ら楽しい弁当のひとつを過ごす。復路も探鳥を続けたらサンポートに戻った。鳥合せの結果61種を記録したのは驚きでこれは柳沢夫妻、羽田、福岡氏等のベテランに負う処が多く、適格に捉える聴耳の良さ目の素早さには敬服する。一探鳥会として記録された種類数は最高ではなかろうか。記録された種類の多さとは裏腹に出現数が少なかったのは今年の気候と渡来の関りなのだろうか？兎に角和やかな会であった。帰路は車での方々の好意に甘んじ行先に応じて全員が分乗させて頂けたのは大変有難い事であったと思う。

〔記録された鳥〕アオサギ、オンドリ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、トビ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、アオバト、ジュウイチ、ツツドリ、アマツバメ、ヤマセミ、アカショウビン、カワセミ、アリスイ、ヤマゲラ、クマガラ、アカゲラ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、コルリ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、メボソムシクイ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上61種

〔参加者〕和泉勝利、大野信明、佐々木武巳、鈴木大和・俊理・由果、西川喜代世、大坊幸七、園部恭一、長谷川涼子、柳沢信雄・千代子、高梨敏子、富川 徹、国本昌秀、武沢和義・佐知子、山田 浩、金上宣夫・由紀・のりこ、田中金作・礼子、道川 弘・富美子、早瀬広司、霜村耕一、福岡研也、高田雅之・早苗、戸津高保・以知子、羽田恭子、田辺 至、井上公雄 以上35名

曇 4 : 00 ~ 9 : 40

〔担当幹事〕戸津高保、柳沢千代子、井上公雄

〒064 札幌市中央区南6条西11丁目 共済ハウス2F

植苗ウトナイ

朝7時、突然の注文に家内がブツブツいいながら作った弁当を持ち喜び勇んで家を出た。途中、柳沢先生ご夫妻・清水さんと合流する。皆さんの装備を横目で見ると「あっ！」水筒はまだしも双眼鏡の忘れにガッカリ、で

61. 6. 15

渡辺 照彦

もウトナイ湖の探鳥が初めての私は、この季節に見られる鳥のことなど全く見当のつかないまま、やみくもに楽しい気持ちで植苗駅に到着する。

堀内、竹内両さんから今日の日程を聞く、頭の上を飛

ぶ鳥に気を取られる。トビ、ハシボソガラスだと後に知る。途中「エナガで一す。」の声、野次馬さながらに走る。何も見えない。いまさらながら双眼鏡の忘れをくやむ。どなたかのプロミナーの空を持つ「ちょっと見せて下さい!」「いま、むこうの藪の方に入りました。」こりゃ駄目だ、こりゃ駄目だ。何となく所在のない気持ちで道端の野草を見る、クサノオウが満開だ。しばらく行くと草むらに人だかり、何かと思い足を向ける。オオアマドコロがきれいだ。自分の知っている草花があってホッとす。道川さんが「ナルコユリとの違いは茎に何とか(聞きのがし)があるので区別がつく。」という、そこまでは知らなかった。しばらく藪道を歩く、ご夫妻で鳥仕事をしている人に出会う。「ときどきこちらに来られるのですか?このあたりに鹿がいるのでしょうか。作物が荒されるのですが、その足跡が先の割れた跡のようなんです。」「そうかも知れませんね?」よくわかりません、どうなのでしょう。アカゲラが雑木の中をかすめるように飛ぶ。足元に見たことのない草花を見つける。藪を抜けたところのいた先程の道川さんに聞く、図鑑で確めネバリノギランという。

急に視界が開け目的地に着く、5・6年生ぐらいのお嬢さんが「コヨシキリだ。」という。丁度プロミナーにとらえている方がいた。覗かせてもらう。原っぱの低木の梢で囀る姿に愛らしさと懸命な営みに感動が走る。柳沢先生の奥様が「双眼鏡をどうぞ」という。遠慮なしに拝借する。ノビタキ、コブハクチョウの親子、ホオジロ、エゾコリンゴの藪の中に何とかがいるという。昼食をとりながらノゴマを見る。カメラに納めたくて近づくと、逃げられる。振りかえると皆さんが私を見ている

「しまった」不作法さにはじめる。魚釣りに行ってトンボを取るのたとえ、異質な者がウロウロ、会の雰囲気や目的に添わなかったような反省をしながらも、皆様のご好意にあまえて子ども心呼びもどすことができた。

何と思われたのか堀内さんが「原稿を」といわれる。「私は会員ではありません。」「年会費1,500円です。」ポケットをさぐると1,470円しかない、それで入会申込書と領収証をもらう。後日不足分をと思い乍ら感想文をお引受けした。

やっぱり、思ったとうりの楽しい探鳥会であった。深謝。

〔記録された鳥〕アカエリカイツブリ、カイツブリ、アオサギ、マガモ、ヨシガモ、トビ、コウライキジ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、アカゲラ、ヒバリ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、シマエナガ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、ホオアオ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、スズメ、ハシボソガラス、(コブハクチョウ) 以上37種

〔参加者〕井上公雄、大野信明、金上倫子・由紀、今野弘、佐々木武巳、高田雅之・早苗、谷ロー一・登志、西秀司、田中礼子、清水朋子、竹内強、戸津高保・以知子、堀内進、羽田恭子、福岡研也・玲子、松井昌、難波茂雄、真木幸三、道川弘・富美子、根岸工、柳沢信雄・千代子、渡辺照彦 以上29名

〒061-22 札幌市南区藤野3条4丁目358

東米里

久しぶりに、一家そろって探鳥会へ出かけました。集合場所に着く前、車の中からすぐ近くのコウライキジを見る事ができました。とても美しい羽根です。幸運だったと思います。

集合場所より出発し、ホオアカを初めて見つけました。後から見るとスズメの様ですね。

次にノビタキを見ました。顔が黒くとてもカワイイ鳥です。巣立ち雛もいます。アリスイです!とても変わった鳥に見えます。それにキツツキの仲間と聞きおどろきです。ノゴマです。ノドの色が印象的な鳥です。バーミリオンという色だそうです。近くの木ではカッコウも良い声で鳴いています……。

東米里は市内から近く、とても静かで良い所ですが、産業廃棄物の捨て場等になっている為、年々鳥の領域が狭められている様です。何とかこの場所を残す事ができ

61. 6. 22 関口 洋子

れば、と思っているのは私一人でしょうか。

〔記録された鳥〕トビ、キジ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、アカモズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、シマセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメコムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス 以上27種

〔参加者〕井上公雄、大野信明、大沼和春、おおさわとしかず、大浦美佐子、佐々木武巳、清水朋子、新谷喜信、関口健一・洋子・誠・晃、園部恭一、竹内強、戸津高保、早瀬広司、場谷内ルミ子、三浦美重子、山田甚一・れい子、柳沢信雄・千代子、横田通典 以上23名

〔担当幹事〕早瀬広司、関口健一

〒063 札幌市西区平和2条1丁目-26



〔ウトナイ湖〕

昭和61年11月16日(日)

湖畔は北からの渡り鳥、ガン・カモ・ハクチョウ類が集ってにぎやかです。パンダ調のミコアイサも可愛い姿を見せてくれます。また、オオワシ、オジロワシ、ノスリなどのワシ・タカ類が割合見られる例会です。寒い日になることもありますので、暖かい服装で参加して下さい。

午前10時 ウトナイレイクホテル湖畔側集合。

〔小樽港〕 昭和61年12月14日(日)

祝津海岸や小樽ふ頭などを歩きます。冷たい風の吹く海岸で、シノリガモ、ホオジロガモ、コオリガモなどの冬ガモ類やカイツブリ類を観察します。ウミスズメ、ウミガラスもみられるといいですね。相当寒いので、帽子、手袋などお忘れなく、バスで移動しますので参加費が700円程かかります。

午前10時 国鉄小樽駅待合室集合。

〔藤の沢〕 昭和62年1月25日(日)

白鳥園でバードテーブルに集る鳥達を観察します。薪ストーブを囲んで小鳥の村・名誉村長である小沢さんのオンドリの話の聞いたり、おいしい豚汁を食べるのも楽しいですよ。参加費は500円程です。

午前10時 白鳥園集合(定鉄バス 定山溪線 藤の沢下車徒歩20分)

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和61年11月9日(日)、12月7日(日)

午前9時30分大沢駐車場入口、または午前8時30分百年記念塔前集合。

いずれの場合もひどい暴風雨、暴風雪でないかぎり行きます。

昼食、筆記用具、観察用具をご用意下さい。

探鳥会の問い合わせは、戸津011-831-8636まで。



定例幹事会報告

61年6月4日(水)

18時30分～20時30分

札幌市民会館会議室

出席幹事9名

1. 総務、探鳥、編集、会計の担当幹事から1ヶ月の活動報告がありました。
2. 会員名簿についての意見が出された。内容は新しい会員が入った場合の扱いで、新しい会員になっても「野鳥だより」を送ってくるだけで、会員名簿にも載らないし、会員になった実感が湧いて来ないので会員名簿に載せて会員名簿を送ったらどうだろう。これに対して幹事間で討議しましたが結論が出ず次回に持ち越しました。

61年7月2日(水) 18時40分～20時30分

市民会館会議室 出席幹事8名

1. アオバトが小樽市の鳥となった事を記念する「市の鳥制定を祝う会」への参加要請がありました。
2. 野鳥写真展が無事終わったという報告がありました。
3. 野鳥だより64号が2～3日中に発送できるという報告がありました。
4. 新しい会員名簿をつくることについて協議しました。
5. 地方の会員との交流を含めて、会員からアンケートを取る件について話しあいました。

本のごあんない

このたび、北海道新聞社から「新版・北海道の野鳥」が出版されました。監修は、本会々員の藤巻裕蔵氏、解説を同じく本会々員の小堀煌治氏が書いております。

道内で撮影された野鳥288種を収録しており、写真も鮮明でビニール表紙製のコンパクトな本なので、フィールドにも持参できます。写真提供者の中には、本会々員の方がたくさんおりますので、ぜひ一度ご覧下さい。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1 - 18287

☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465